



小説
冷い顔

永代美知代

「アカサ行つて頂戴つて云ふに！」

「あんた何を云つてるの？ 此處赤阪ぢやありませんか」

貞子はひづかる子供を負つて、蝙蝠傘もささずに歩いた。つい此頃店を移つたばかりの伯母の家を探すやうにして、目印にした米屋の隣家を見ると、美しい總硝子の飾窓である善の洋品店の店つさが、まるで變つて、藍と白の細い縞を織つたツツクの日覆が一面にかけられた。

「オヤ」

「貞子が立止つて、不思議さうに見てゐると

「アラ、被入つしやい」

氣の無い聲で呼びかけたのはお小夜であつた。貞子が着てもよさうな程、年に合せてじみな中形をしどけなく着た上に、それでも帯だけは娘らしい色朱子のをべめて居た。

「あゝ、アカサあつた〜、母さま、お小夜さんあつたよ」

斯う子供は嬉れしがつてはしやいだ。

「ふん、アカサあつたねえ」

云ひながらお小夜は

「まアお上んなさい」と貞子を振り返つた。だが先きに立つて内へ案内するでも無い。店の正面に梯子をかけて、新しく造つた大和屋と云ふ金文字の看板を打ちつけて居る職人の方を、たゞ黙つて見上げて居るのであつた。元から一體愛嬌に乏しい娘なのではあるけれど、今日は特別お小夜の容子を變だと感せずには居られなかつた。

「伯母さんは？」

「居ます」

「別に変わりもなくつて？」

「ええ」

「如何したの、一體？」

「え、如何もしないの」

「甚く不機嫌じやないかね」

貞子の調子は殿かつた。何だつて冷遇するんだらう馬鹿々々しいと云つた氣持が自然と表はれた。

お小夜はたゞ、莞爾笑つて見せた。

「先刻私電話をかけましたが、留守ぢやつた、朝から何處かへ出掛けて居て？」

「否、たゞ此處へ来たんだわ、だつて昨夜つたらあなた、随分酷いんだもの」

「兄さんは何處へ泊つて？」

「歸つたわ、あれからすぐ」

「屹度私の事て怒つたんでせう」

「ナーニ」貞子は首を振つた「だけでもねお小夜さん、あんな時少し位忙しくなつて、どうにか繰り返して来るものよ、宅ぢやお蔭で夫婦喧嘩をしちまつたわ」「まあ如何して？」

「うそだよ、ホ、ホ、」

如何してもあるものか、思ひながら貞子は軽く笑つて、一人てずん／＼内へ入つた。

「母さま、それ墓ね」

子供は脊から下されると直ぐ、上り端に据ゑられた旋風器に目をつけた。

「え、／＼さうですとも、だから觸つちや駄目よ、てわいから」

「こわいもの、ね、墓々」

子供は頻りに旋風器を指した。

「岩下は？」

店にも奥にも、唯一人店員の影も無い。

「益だから歌舞伎座へやりました」

「皆な？」

「先とんだだけ残つてるんだけど、今一寸出掛けたいの」

「さう、ぢや今晚も駄目ね、せめて昨夜のうちめ合せに、皆なで何處かへ出掛けやうと思つたのにな」

「行かれるものですか」

お小夜の返事は相變らずうま味の無いものである。

「すうちやん」

階子段を下りたおすゑは

「アラ被入い」云ひながら二足三足又上へ上つて「おつかさん、お貞姉さんよ」

だが二階からは何の返事もなかつた。

「すうちやん、何しておいてなの、おつかさんは？」

お小夜は不機嫌さうに訊いた。

「お手紙かいてるの」

「長いお手紙！いつまでかゝるんだらう？」

「ぢや、お助けするといけない、此處に居ようか」

「おゝのよ姉さん」

おすゑはお下髪を氣にしていぢりながら、子供の手を引いて、階子段を上りかゝた。

「母様も被入いな」

子供に呼ばれて、貞子は進まぬながら後から續いた。

「来るんぢなかつた」

ついそんな事を思はずには居られない。二階へ上ると入聲の塵敷の窓際に据ゑられた机の前で、伯母は眼鏡をかけて筆を執つて居た。

「オヤ被入つしやい」

廊下に立つたまゝ、もぢ／＼して居た貞子が斯う、聲を掛けられたのは、それから暫く絶つて、一寸と間の抜けた頃である。二階の無い平屋にばかり住ひ馴れた子供は、やたら階子段を珍らしがつて、その間に二度も三度も、おすゑと一緒に二階を上り下りして居たのであつた。

「昨夜はどうも！」

傍へ寄つた貞子の手を執ると、伯母はわつと聲を立て、泣き伏した。

「伯母さん！」

貞子も譯無しに涙がこぼれた。昔また貞子が幼くて、郷里の家に居る時分から、この伯母さんは何ぞと云へばよく泣いて、折々逗留に来る時など、顔を合せると挨拶よりも先づ、涙が先きに立つ習慣であつた。

ふと氣がつくと、物干臺に居た印袴天の職人が此方の光景を不思議さうに見入つて居た。貞子は極り悪さに、思はず赫くなつて俯向いた。

「伯母さん、泣かないでよ」

「ま、うちではの、小夜さんの機嫌が悪うていけませんの」

眼鏡を脱つて袂で拭いて、伯母は眼を擦つた。「如何したのか、ぶん／＼ぶん／＼してからに、本當に職人が大勢出入つとるのだから、私ア耻しいやら情けないやら」

「又してもにぢみ出る涙をふき／＼するのである。」

「何が気に入らんのか知らんが、昨夜あなたの方から折角よう誘ふて呉れましてもの、着て出る着物が無いから行かれん云ふての」

「着物なな、何でも好いのに」

「否、買ふてあるんです、あるんぢやに縫ふて無いもんぢやけん、縫ひもせんで置いて、無理ばかり云ふんぢやすけん」

「伯母さん、やつぱり病氣のせいですよ」

斯うは云つたが、貞子の眼にも小夜の我儘は見えて居た。一體久しい前に良人を亡くした伯母は、寡婦に有り勝ちなヒステリックな點があつて、誰とても折合ひ難い性格を持つて居た。だが小夜とは別してよ

く母娘喧嘩をするのであつた。

「つい其處の耳鼻科で見て貰ふたんですが、もう治つた云ふて行かんのですけん。診察料を二圓も出して、一度見て貰ふたばかりで、本當に我儘者云ふて、あんな娘はありアしません」

「皆な病氣のせいですよ」

貞子は今更のやうに伯母の顔を見た。この頃の暮に、又持病のヒステリックが起つたのはあるまいかと思つたからである。氣のせい、伯母の顔は何處となくぼやけて居るやうにも思はれた。

「伯母さん、何處か悪くない？」

斯う云はうとして居ると、

「私は此頃大變肥りましたらう、のう、手なんぞこんなに肥りましたが」

伯母は片手で手首を握つて見せた。

「さうね、さう云へば血色が違つて來ましたね」

それはあながちお世辭でもなかつた。去年の秋、初めて大和屋の老舗を買つて、田舎から出て來た當時の伯母に比べると、幾らか肉もつき、顔色もよくなつて

であつた。だが貞子の身になると、それも餘り伯母へ對してあつかましいやうに思はれた。

「よしませう、忙しいつて云ふんですもの」

「だつて子供位見られるさ、すうちやんが居るんだもの」

「だつて——それよりか神樂阪へても行きませう、私

メリンスの浴衣を買ひ度いんですもの」

「買ふさ、だが神樂阪もつまらないナ、兎に角出掛けよう」

江戸川の電車まで來ると、良人は又云ひ出した。

「如何だ、乗るかい？」

「何處へ行くつもり？」

「無論赤阪さ」

「まだそんな事云つてるの？」

「僕等が行つて誘つたら、伯母さんか誰か一人位行くだらう」

「だつて忙しいつて云ふんですもの、行き度くないものを、無理に頼んでまで行つて貰はなかつたつて好いわ」

「君は本當にねぢぢものだねえ、赤阪ぢやそんなもの

居る。これで商賣さへ緒について、如何か斯うか合つてはへ行けば、ヒステリックの起る心配もないのである。

「昨夜はとんだ心配をかけましての」

「アラ伯母さん、私こそ、ですから私、今日はねその

き詫に來ましたの、高山も社の歸りを此方へ上るんで

すつて」

「アラさう、小夜が行かないので、高山さんがお怒

りのぢやらうと思ふての、私ア昨夜は寝られなんだの

ぞい」

「済みません」

貞子は笑ひながら頭を下げた、だが昨夜の事を考へると、貞子はつまらなくつて堪らない。良人と二人で久し振りに恵智十へでも出掛けよう云ふので、従妹の小夜を誘ふと、店の方の手が足りないから行けないと云ふ。伯母でも代りに來ることか、忙しいからの半點張りて、おまけに突然電話は切られて了ふ。

「ぢやない、氣の毒だ位思つて居るのかも知れないよ」
「だつて——」
「ぢや子供を預けて、二人だけ行くさ、ね坊や、お電車に乗るんだねえ」

「お電車乗つて、アカサ行かう」
先刻から一牛懸命電車の灯に見とれて居た貞子は、急にアカサアカサとせつさ初めた。

「嫌な父さんだね本當に、些少は遠慮つて事をお知りなさいよ、忙しいからつて云ふ處へ子供なんか置いて行かれるもんですか」

貞子は云ひ兼ねて居た事を、ついむしやくしやまぎれに云つてのけた。

「ぢやましませう！」
高山はとつと歩いた。子供を負つて貞子もやけに歩いた。

「神樂坂へ行きませうか」

「さうね」

「如何するんだ、さつさとお定めなさい！」

「何處でも好いわ私」

人影は見えなかつた。

「まあ甚しい！」

稻妻のやうに斯うした思ひが、貞子の胸に閃めいた。ともう狂人のやうになつて、終點へ駆け出した。

「蛇度、何處かへ、私を置いて行つたのに違ひない！」

だが其處にも良人らしい姿はなかつた。貞子は又引返した。改代町を通つて、何と云ふ坂だか、烈しい坂をあえぎ、登りもした。

「父さん何處行つた」

子供は何度となく繰り返す。

「本當にねえ一貞子は聲をあげて泣き出したいやうにも思つた」父さんはいけないなえ」云つてはならぬと思ひながら、つい斯うした事を子供に云ひ掛けた。

「馬鹿ね、本當に、父さん」

首を傾げて、淋しい筈の顔を覗かれると、貞子は猶更悲しくなつた。いつそ此儘宅へ歸つて了はうか、さうも考へた。だが歸つて見て、その人の居なかつた時のわびしさを思ひやると、又急ぎ足に薄暗い赤城下の

川添ひの櫻の木蔭に坐つて、五六人の男が釣を垂れて居る。貞子は不愉快な思ひをしながら、わざとそこから寄つて歩いた。良人と離れんの心持ちで居りながら、寄り添ふて行くのを心苦しく思つたからである。

「オヤ、父さまは？」

子供に云はれて、ふと氣がついて見ると、良人の影が無い。貞子は驚ろいて四圍を見廻した。白地に黒紐の羽織を着た男が、彼方側の五六間先きを行つてゐる。

「父さんつて云つて御覽」

斯う子供に教へた貞子の聲はかすれて、咽喉にかすりついたやうに聞へるのであつた。

「父さんあん！」

子供は呼つた。だがその影は振り向きもせず、ずんずん進んで行く。

「父さんあん——！」

二三間追かけた貞子は、その男の帽子が良人のマナマと違つて、麥藁なのに氣がつくと、若しやと思つて改代町の横町をすかして見た。二人が神樂坂へ行く道は、いつても此處から折れる例である。だがそれらし

町を歩いた。神樂坂で知合の本屋へ寄つて、それとなじに訊いても見たが、良人はやつぱり來なかつた。がつかり失望し切つて、見付から電車に乗つた貞子は終點から臺町の宅までとでも歩いて來る元氣はなかつた。

「父さん何處行つた？」

子供はまだ起きて居て、折々斯うした事を繰り返す。車に揺られて子供が寝つくくと、貞子は堪らずなつて頬ずりをした。

「父さん馬鹿ねえ」

寝た子を抱いて門を入つて來るうちも、若しやと思ふ心から、戸の隙間を覗いて、電燈の光を窺つた。家の中は眞暗闇で、貞子は今乗つて來た車を、今一度呼び戻して、江戸川へ引返さうかとも思つたが、思ひ切つて兩戸を引開けて子供を寝かすと、熱い涙が思はず知らず溢れ出た。

「一寸と電話を貸して頂戴な」

斯う出入の酒屋の店に入つて行つたのは、最う彼是十一時近い頃で、小僧達が眠さうに格子戸をはめて居た。貞子は思ひ餘つて、お小夜を電話口へ呼び出した。

だが高山は其處へも行つては居なかつた。踏んで居る大地が、その儘めり込んで行きさうな程、家へ歸つて来る貞子の眼先さは暗かつた。十二時の鳴るのと一緒には戸締にかゝつた處へ、高山が腹立しげな下駄音をさせながら歸つて来た。

「あなたはまだア！」
「馬鹿、足も何も棒のやうになつちやつた！二度も三度も神樂坂を行つたり來たりさせて、君は一體如何したんだ？」
「私こそだわ、だつて突然居なくなつたりするんですもの」

「此處から行かうつて云つたぢやないか、その積りて居ると、君がついて來てないんだもの、俺ア屹驚したア！」
「マア！」
二人はブリブリ怒つた。

「下らない！忙し中を折角遊ばうと思つたのに、すつくり駄目になつちやつた、こんな不愉快な事つてあるもんでない！」
「本當につまりらない、皆なち小夜が悪いんだわ」
「さうさ、一體あの娘位うまみの無い女もなからうね」

「無理もないわ、終日こんな穴みたいな帳場にばつかり居るんですもの、折々氣散じに何處かへ出掛けたら如何？」
「着物が無いから出られやせん云ふんですけん、田舎臭いのばかりで些少も新しいのを造へんもんですけん、ですけんどのう、何分商賈が合つて行くものやら何やら、それも解らんのにのう」

「幾ら私が馬鹿でも、創業の際に、そんな着物の事なんかで怒つたりしやしません」
「それぢや、何が氣にいらんのですうア？」
「一寸とお貞姉さん、兄さんよ」

おすゑが寝た子を負つて店口から呼び掛けた。見るとすぐその後から續いて、大輪のダリヤの亂れ咲きを二本、眞白な硬質陶器にさしたのを手にした高山が、莞爾々しなから入つて來た。

「遅いわね、如何なすつて？」
「一寸と他へ寄つたから、伯母さん、これはダリヤ會て貰つたのです、差上げませう」
「へえ、これはどうも」

「花好きな伯母は喜んで、掌へ載せたまゝ、何時までも見入つて居る。」

「本當だわ、表情つたら些少もないんですものね」
「有るさ、怒ると甚い顔をするよ」
二人は不色色だと云ふのではない、たゞ冷たい顔つきの若い従妹の容子を思ひ出して居た。何處へ連れて行かうと誘つて見ても、お小夜は何時でも定つて、「どうても好いわ」と云ふのが癖である。行き度くないのかと思ふと、さうでも無い。遠慮してさう云つて居るらしく思はれる點がなくもない。

「つまり田舎者なんだね、ものの云ひ方を知らないんだよ」
斯う高山はお小夜を辯護した。

来る筈の高山を待ち兼ねて、一同と一緒に御飯を濟ませた後、食卓を圍んで、貞子は伯母の愚痴を聞かされた。

「何ぼでも云ひなさい、皆なお貞姉さんに聞いて貰ふが可い、私だつて堪らない、終日店で働いて、夜十二時過ぎて二階へ上ると今度はおつかさんから七九どいお小言を聞かされんぢやもの、死んだ方が餘程ましだわ」
「見なさいのう、すぐあれてすけん」

「御飯は兄さん？」
流石にお小夜が斯う笑顔を見せた。

「もう済ませました。それよりかお小夜さん、昨夜の代りだ、何處かへ行かうぢやないか、ね、伯母さん、連れて行つても好いてせう」
「え、え、昨夜はどうも済まない事で」
いや、此方こそ、とんだどうも……

「岩下が留守だから駄目てせう」
又良人の氣を悪くしないやうに、氣を揉みながら、貞子は斯う口を入れた。

「い、え、行きさへしませア、今日はもう浴衣も一枚私が縫ふてやりませしたけんのう」
伯母は貞子を振り向いた。

「行く事？お小夜さん」
「え、如何でも」
貞子はちらりと良人の顔を見た。

「如何でもだとさ、だから行くんだよ、ね、行くんだね」
だが高山はすぐには立たないで、敷島を一本抜さながら、妻を見て苦笑した(完)